文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間　会報 No.78　2017 年 6 月 18 日発行
川崎市幸区古市場 2-109　京浜協同劇団内　TEL 044-511-4951　郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

川崎郷土・市民劇　第 6 弾

「南武線誕生物語」が開催されました

5 月 13 日（土）、14 日（日）多摩市民館、19 日（金）～ 21 日（日）エポックなかはらで開催された「第 6 回川崎郷土・市民劇」を観劇、出演された方々に感想を寄せていただきました。

南武線誕生物語―夢見る男たち―を観て

鉄道は地域の方々との共存あってこそ

公家　進

「労働者の街川崎から、基地の街立川を結ぶ 35.5 キロの南武線」と言われた時代がありましたが、首都圏ではあまり目立たない地味な黒字線区の印象が定着してきたように思います。私が車掌時代、車内で乗車券を拝見していると、よくお客さまから「南武線は私鉄なの？」と尋ねられました。「はい、その昔は私鉄でしたが今は JR です。」とお答えしたことが幾度もありました。先ずは川崎駅南武線ホームの発車ベルの音が鳴り響くと幕が開き、南武線の旅が始まりです。

プロローグ南武鉄道電車内…ガイドの好演が光り開幕から拍手が起こる。迫真に迫る嵐の多摩川河川敷シーンに続く、八幡神社境内。秋元が「これは一揆ではない。村民の意思をお上に伝える請願なのだ。いいか、このアミガサは仲間の団結の証だ。」国鉄民営化に向けた過程で展開された国と国鉄当局による国労攻撃の中、1 センチ四方の国労バッチを胸にした時代が重なる。舞台は一向に鉄道建設が進まない中、川向う

「南武線誕生物語」の舞台（写真©小池汪　以下同）

東京側は鉄道輸送による砂利運搬が進む苛立ち。しかし漸く建設資金集めにこぎつけた秋元の家での妻ふじとの会話が秋元の胸中を示してくれる劇中の鍵となる場面であったと思う。ふじは言う。村や橘樹の人々のために捨身となって働く、あなたが眩しいのです。影となり時として日向となって秋元を支え、あなたの夢は私の夢。あなたの、その夢を私に分けてください。あなたと一緒なら…。胸元が「キューッ！」となるのを堪えて間もなく、料亭田中屋の場面。いよいよ浅野と安田登場の一席。南武鉄道を産業鉄道としての使命を図る大富豪同士による談義もひと段落し、浅野の「女将、酒と肴、それと踊りだ。」の一声で舞台は一転艶やかな場を醸し出す。金屏風をバックに舞妓さんたちが踊る「梅は咲いたか」の舞いと小唄には男性諸氏のみならず、一瞬にして会場全体を魅了した感があった。あっぱれ！質の高い芸術性と日本文化に拍手。

舞台は休憩を挟んでの第二部、麹町事務所ではそれとは対照的に人民のための人民による会社を創れとの注文が続き、悩み苦しむ秋元。そして最後の最後まで民衆の意を汲んで容易に浅野に財政支援を求めない秋元に観ている側も冷や冷やしながら時計を見てしまうくらいだ。「まだ引っ張るのか…この劇は時間内に終

われるのか…」と。そして、「私は教育にお金を賭け、人を創る、新しい価値を生む人づくりをするということを学んできました。」と説く浅野の理念に共鳴したのかここでやっと手を取り合う 2 人を確認できてホッとしました。その後、秋元に対する罵声が伴う一方の声。インターナショナルのうたごえがよさこい節に変わってしまう展開は芝居ならではの醍醐味なのだろうか…。

昭和 5 年、幾多の苦難を乗り越え遂に南武鉄道は全線開通を迎えましたが、そこに働く鉄道員の姿が見られず残念でした。当初の台本にあった【特別出演】南武線の方とあったようですが、最終公演の舞台だけでも参画できたら更に 90 周年記念に花を添えられたのではないかと思いました。鉄道は地域の方々との共存あっての乗り物と教えられる思いでした。

（国鉄横浜うたう会）

素敵な思い出になりました

袴田　羽音

今回、川崎郷土・市民劇「南武線誕生物語」に出演させていただきました、袴田羽音です。高校演劇をやめてから、舞台とは縁のなかった私ですが、以前出演していた父親の勧めで参加を決めました。いざオーディションが始まってみると、演技や歌がうまい方ばかりで非常に緊張しましたが、演出の板倉さんや周囲の方々のおかげで、のびのびとやることができました。

オーディション終了後、「白井房子」役をいただきました。房子は貧しい農家の娘で、その貧しさのあまり姉が身売りをしてしまう、というような役だったのですが、最初のうちは慣れない言葉遣いと、自分の知識のなさゆえの想像力の乏しさに苦しめられました。終演後に知り合いの方から「歴史の勉強になったでしょう」と言われたのですが、まさにその通りで、劇中の舞台である大正・昭和に起きたことや、人々の暮らしを知らなかった私は、はじめ、役として動くことも話すこともできませんでした。何度かシンポジウムに参加させていただいたり、関連する書籍を読んだり、周りの方に教えていただいたりして、役についても考えました。

また、普段ではありえないような貴重な経験も、たくさんさせていただきました。プロの方に自分の演技を見ていただくのも初めてのことでしたし、そもそも七五三以外で着物を着ること自体が初体験で、何も

かもが新鮮でした。そんな私の経験のなさに、ご迷惑をおかけしてしまうことが多々あったのですが、そういうときにも周りの方々が相談に乗ってくださったり、着物の着付けを教えてくださったり、様々な形で支えてくださいました。今は、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

稽古中は、自分の場面がきちんと完成できるか不安で、押しつぶされそうなときもありましたが、最終的に無事に本番を迎えられ、そして何事もなく終えられて、本当に良かったです。

最後になりましたが、私はもともと、川崎演劇まつりや、この川崎郷土・市民劇を観に行ったことをきっかけに舞台に興味を持ちましたので、今回その憧れの舞台に出演できて、本当にうれしかったです。素晴らしいキャスト・スタッフの方々にも恵まれ、この上なく素敵な思い出になりました。本当に、ありがとうございました。

（協力出演者）

「表現の自由」を具体的に経験

川口　崇

「表現」は、憲法上、最も重要な人権として位置づけられます。なぜなら、人が、表現をすることを制限されれば、たとえば、政治的な意見を自由に述べることさえできず、その意見を受領する（知る）こともできないからです。

私は、表現の自由という権利について机上で学んだものの、肝心の表現方法や表現のあり方については、知らずに生きてきました。

偶然の重なり合いによって、「南武線誕生物語」に出演することになりましたが、無事に千秋楽を迎え、出演者・スタッフ・京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間の皆様と一緒に、１つの芸術作品を作ることができ、とてもよい経験ができたと感じております。

芸術的表現には、唯一の正解が存在しません。演劇では、脚本から解釈される振り幅の中で、役者本人・演出家・他の役者との関係性から、より最適な役作りを選択していきます。演出家と役者との芸術的感性のぶつかり合い。その細やかな協同での試行錯誤の積み重ね。私は、当初、これが稽古の核心であることを理解していませんでした。愚かにも、キャラクターの設定や話し方と立ち居振る舞いは、脚本上で既に決まっているものと勘違いしていたのです。

演劇には、与えられる課題に唯一の正解がない分、演技はより難しく感じました。千秋楽を終えた今も、「職員Ａ」としての自分の演技が、正解の１つ足り得たのか、確信を得られずにいます。この難しさが、演劇の魅力となり、演劇人を舞台から離さないのかもしれません。

ところで、憲法で、表現の自由を与えられていても、表現の機会がなければ、絵に書いた餅です。市民劇は、

演劇素人を舞台に上がらせるという挑戦的な試みですが、表現の機会を国民（市民）に提供する意味で、重要な意義を有しています。結成宣言の「文化の砦」を正に体現していると感じます。

演劇素人の一市民である私に、貴重な経験をさせていただき、感謝しております。京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間の皆様との集い（屋上での懇親会）は、とても良い思い出です。

最後になりますが、法律問題でお困りになりましたら、お気軽にご相談ください。その際には、ぜひ「南武線仲間の〇〇です！」とお伝えください。

（弁護士川口崇・045-663-6874）

（協力出演者）

「旬をたのしむ夕べ」を思う

和気あいあいとした時間を過ごしました

小野寺　晃

４月 15 日土曜日の夕方。旬をたのしむ夕べの当日は天気に恵まれ計画通り行われました。

参加者 44 名の中で市民劇出演者 21 名の方々が賑やかで、料理に皆さん堪能されていました。時間の関係で屋上はお開きにした後も一階で時間の許す方の二次会にも多数の人が居残り話題が尽きないようでした。盛大に行われ主催者は満足していますが、次回の時はもっと準備の仕方や、料理・配膳・運搬・片付けなど、改善する点があります。

次回も行うようですが、京浜協同劇団と文化の仲間の絆を強くとの思いで始めていると思いますので劇団員の新人さんの参加が欲しいと思います。できれば下準備からお手伝いをお願いしたいと思います。文化の仲間の役員は高年齢ですのでお手伝いを劇団員の方にもお願いしたほうが良いと思います。

カツオのほかに筍ご飯、ホタルイカなども）

下準備も結構大変で、料理の盛り付け１つにしても時間がかかる作業です。ただの飲み会ではなく「旬をたのしむ」会なので、メニュー表を作って、各料理のご紹介もしました。

「旬をたのしむ夕べ」も今回で３回目になりますが、今回の旬のメーンは、カツオと筍でした。筍は、横浜市保土ヶ谷区の二村さん（文化の仲間代表）の家の近くになっているので、地主さんに事前にお願いして、２日前の木曜日に取っていただき譲っていただいた新鮮な筍です。

この新鮮な筍をどういう料理にするかも、この会の見せ所ですが、筍焼きも筍ご飯も大好評でした。筍ご飯は大釜が必要なので、西海亭の須田さんに作っていただきました。

カツオは、劇団の細田さんに準備していただき、メーンディッシュにふさわしい華やかな料理になりました。

いろいろ工夫をしながら準備しましたが、市民劇出演の皆さんを始め参加者の方々が「おいしい」と言ってくれて、和気あいあいとした時間を過ごしていただいたので、やってよかったと思いました。

（文化の仲間世話人）

室ちゃんをつれづれに思う

若菜　とき子

劇団創立メンバーの中に室野定子、若菜とき子のほか多くの元気な仲間たちが参加した。創立以来、公演の「主役」を張ってた室ちゃん。ことに小田先生の作品では常に主役だった。小田先生の最後の「おふくろ」を演らせてほしいとお願いしたが「ダメ」でした。役者として遜色はないがとの答え、残念無念 !!

今から 13、４年前、室ちゃんの言動があやしくなってきた。役者も演出も、スタッフとしての腕をふるい器用な彼女が、縫いぐるみの人形の帽子を依頼したが、どうしても作れないと言い出して作業をやめてしまった。今までにないことと不思議に思っていたが、それが病のきざしかな？　言動にも、劇団の運営についても 65 歳定年制をしくべきとか、観客動員数が 30 人以下になったら劇団を退団する等々、おだやかでない言動がしきりだった。本当は、私に愚痴っていたのだろう。

このような病は周りが薄々感じながらも、家族・親族からのキッカケがないと、なかなか言えるものではない。あるとき夫の水野さんから相談を受け、セツルメント婦長だった大山さんに訴え、すみやかな処置ができた。

あれから 12 年間、無私無欲で過ごした室ちゃん !!　ご苦労様。私はまだまだ我欲に取りつかれて過ごしていくであろう。　　やすらかに

2001 年の舞台から

（元劇団員で創立メンバー、元運営委員の室野定子〔本名・水野定子〕さんは長期療養中のところ、5 月 24 日、亡くなられました。81 歳でした。）

連載　「京浜協同劇団」と私――第１回

1960 年代の新しい動きの中で

岡田　京子

①「京浜協同」と私

●「京浜協同劇団」の皆さんとは、ずいぶん昔から親しくして頂いて、「よく知っている」つもりでいたのですが、今回、書かせて頂くことになって、劇団との出会いは何だったのか、いつだったのかと思うと、全くさだかでないことに気付きました。そこで、今や一番の古手・細田寿郎さんにお願いして、一緒に思い出して頂くことにしました。

●劇団の「公演記録」を見ながら話し合ってみると、それは 1966 年の第 13 回公演『真土村一揆』からで、その音楽は、5 人の作曲者（小平時之助・福島雄次郎・浜名政昭・杉本信夫と私）が分担してやっています。それは 1960 年代ならではの様々なことが、大きく影響していたのでした。

② 1960 年代とは

● 60 年代とは、いわゆる「安保闘争」をきっかけとして、今まで日本では見ることがなかったことが、始まった時代といえることでしょう。

音楽の場合は、演劇と違って「一人一人で勝負」みたいな仕事なので、例えば「各音大」や「各師匠の弟子」等が一堂に会したり、一緒の行動をするなんて皆無だったのですが、それを破ったのは「安保反対の統一行動」で、1962 年に「日本音楽舞踊会議」（略・音舞会）というのが発足しました。

そして、またたくうちに、作曲部会・演奏部会・評論部会・舞踊部会などが次々に作られ、活動を始め、また比較音楽学の故・小泉文夫氏の「日本伝統音楽についての講義」などを身近に聴くことができるなど、画期的なことが続いていきました。鈴木たか子さんも、「演奏部会」に入会されていました。

●思えば『真土村一揆』に関わったのはこの「作曲部会」のメンバーで、（安達サンが入会してくるのはもう少し後なので、追って書かせて頂きます）お互いに、経歴も作風も違う 5 人が、それを超えて関わったなど、この 60 年代にしかできなかったことといえるでしょう。

●一方、演劇のほうでも、新しい動きが始まっていたようでした。細田さんやトンちゃん（若菜とき子さん）は「日本鋼管」という大企業の職場のなかで、「川鉄演劇研究会」という演劇グループを持って活動をしておられたのでした。女性が少ない職場なので「日本鋼管」の看護婦さんたちや、まわりの「昭和電線」「富士電機」などの職場からも参加した女性の方たちもあったようで、こういった各職場のサークルが、60 年をきっかけにした音楽のように、地域のなかで合同していった時期があって、「この日・この地で・この人々と」という方向が「京浜協同劇団」を生んでいったといえるのではないでしょうか。こういうなかで、演劇と出会った作曲家の 1 人が、小平時之助氏だったのでした。

第13回公演「真土村一揆」の舞台（劇団50周年記念誌より）

「表現する森の仲間たち」のつどい

二村　柊子

5 月 28 日（日）「表現する森の仲間たち」公演がスペース京浜で開催されました。故たつの素子さんの大切な仲間たちの朗読と音楽とおしゃべりの会です。私はたつの素子という人をほとんど知りませんが、よーく知っている人たちに囲まれて何十年も過ごしました。数年前、時々彼女に会うこともあり、「文化の仲間」にも入会され、さてソロソロと思っていたら 3 年近く前、たつのさんは逝ってしまわれました。

この日のお客様はざっと 30 人、出演者も 30 人くらい､そして､スタッフ多数とのこと。出演される方々は、一人ずつ様々な課題を持っていそうです。たつのさんはこの人たちとレッスンをし、音を合わせ、何を発見し、何を願っていたのだろうと思うとき、私の胸は痛みます。

和気あいあい、気心の知れた仲間たちの集まりに新参者の私は気圧(けお)されそうな 3 時 40 分でした。

（文化の仲間世話人）

「川柳」渉猟

大谷　敏行

川柳を始めて 3 年くらいになりますが、きっかけは何だったのか覚えがありません。最初は俳句だったのですが、俳句は季語があり高尚で自分には敷居が高く感じられ、もともとジョークやギャグが好きなので自然と川柳志向になったのでしょうか。川柳は柄井(からい)川柳という人が江戸時代に創始し、「うがち」の文芸と言われています。「うがち」とは穴をあける意の動詞うがつで、表面に見えないものを掘り出す、普通には知られていない裏の事情をあばくこと、人情の機微など微妙な点を巧みに言い表すことですね。そこから揶揄（からかい)、くすぐり、“ 寸鉄人を刺す ” ような表現を目指すことになります。

もともと私は唯一国語だけは得意科目だったのですが、川柳をやり始めて何が変わったかと言えば、言葉に対するリテラシー（読解記述力)、具体的に言えば読書にしても新聞にしても知らない言葉はノートに書き写し、たまったらタブレットで検索しています。ボキャブラリーを豊かにするようになりました。毎日一句を目標に『朝日新聞』と『赤旗日曜版』に、また、友人にメールしています。

楽しいことよりも苦しみ、悲しみのほうがはるかに多いのが人生だといいますが、人間存在の不思議さ、面白さ、政治や社会への批評眼を養うにはうってつけの、誰でもできる文芸ではないでしょうか。

「何を始めるのにも遅いということはない」と言いますが、若いとき演劇を目指し、途中で断念し、長いブランクを経て再度役者を経験している私ですが、川柳は一服の清涼剤、芝居にも役立つのではと、今後も続けていくつもりです。

川柳ではないですが、最近 “ 心の琴線 ” に触れた文章を新聞から抜粋して記してみます。

> 国家がいくら強くても社会がぼろぼろになったら意味がない。社会が重層的な形で強くなることで、ひいては国家が強くなる。社会は国家ができる前より存在していただろうし、できあがった社会がイコール社会でもない。日本の中にはたくさんの社会が存在する。いわば外側の殻をまず固くするのか、中身を一つひとつ鍛えていくのか。その進め方の違いということになる。それは憲法改正にどういう意味あるいは優先順位を与えるかという違いにもなる。
>
> （『朝日新聞』「国家と社会どちらが先か」より）

最新作

「銃剣道」撃ちてし止まん国のため

（『赤旗　日曜版』4 月 23 日号掲載）

会報編集部から　今回から、最終面の「ギャラリー」に劇団員の大谷敏行さんの川柳を連載します。

京浜協同劇団第 91 回公演

別役実作「病気」に決定

京浜協同劇団　**岡野　三郎**

劇団では、2017 年秋の本公演の演目を年明けには候補作を出し合って検討を重ねて参りましたが、以下のように決定いたしました。何と 2018 年の分もセットで決めてしまいました。

2017 年秋公演：別役実作「病気」 藤井康雄演出

2018 年秋公演：和田庸子作「おりん」 演出者未定

後者は和田氏が深沢七郎作「楢山節考」に着想を得て第二稿を書き上げたもので、現在、完成稿に向けて改訂作業中です。この場では前者の「病気」に関して、制作部から第一報をお送りします。今回、不肖ながら制作部長を拝命し、これから試行錯誤で作業を進めて参りますので、叱咤激励をお願い致します。

さて、別役実と言えば日本を代表する劇作家です。1960 年代から活躍し、日本の不条理演劇を確立した第一人者です。1937 年生まれの 80 歳、パーキンソン病と向き合いながら、現在もなお旺盛な創作欲をお持ちです。最近では、2015 年春から 1 年半をかけて 18 団体が氏の 19 演目を上演した、「別役実フェスティバル」が行われました。別役実の作品は特に初期のものは不条理で難解なのが当り前みたいなところがあるようで、それでも広く人気があるのは何故なのだろうと思いますが、この「病気」も正にそうです。

「病気」は 1981 年に文学座が初演、乾いた笑いが次第に怖さをはらんでいく不条理劇です。2009 年の公演パンフにこんな記述があります。要約して引用します。

【時代設定の分らない舞台。電信柱の下に汚れた天幕が張ってあり、粗末なベッドが一つ。そこは《応急救護所》である。看護婦の衣装を着た女が、鞄とコウモリ傘を持った男に、「あなた、病気じゃありません？」と声をかける。「病気じゃない」と男は言うが、ここから緩やかに人々の関係がゆがみ始め、男が病気にさせられていき、最初に靴を取られ、続いてズボンを脱がされ、どうしようもないまま、最後は路上に放り出されてしまう。笑えるが、その笑いは冷笑的で苦みが多いものである。】

その通りです。劇団員が演目の検討会で観た DVD でも、思わず笑えるのですが、後味の悪さがつきまといます。冷笑が過ぎていてたじろぐのか、ストーリーが現実離れしているからなのか。したがって上演に反対意見も出されました。

しかし、自らの意思を明確に持たず状況に流されやすい危うさや、他者を蔑むことで己を保とうとする傲慢さなど、時代と人間を多面的にあぶり出していて魅力的だ。喜劇的で従来の京浜路線にはない面白さがある等々、上演を支持する声もまた大きかったのです。

ご本人あるいは研究者などを招聘して学習する。稽古の中で藤井演出の下、戯曲解釈を深める。また、「老骨」に鞭打って心身を若返らせ、活舌や切れのある動きを取り戻す。そうすれば、その先にきっと我々が体験したことのない、ユニークな「別役ワールド」が待っていてくれるでしょう。

別役実作品への挑戦を熱く応援して下さい。文化の仲間と共に記憶に残る第 91 回公演にしましょう。

京浜協同劇団　第 91 回公演

作・別役 実／演出・藤井康雄

病気

これは不条理か、お笑いか？
日常の　裂け目を覗いたら
そこは　病気の製造工場――

日　程　2017 年 11 月 17 日(金) 18 日(土) 19 日(日)
23 日(木・祝) 24 日(金) 25 日(土) (予定)

会　場　スペース京浜

問合せ・申込先　京浜協同劇団

〒 212-0052　川崎市幸区古市場 2-109　TEL 044-511-4951　FAX 044-533-6694

メール : keihinkyoudougekidan@nifty.com　HP: http://www.keihinkyoudougekidan.com

詳細は、お配りするチラシまたは劇団ホームページをご確認ください

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市民劇場　第 338 回例会
青年劇場公演　みすてられた島

作・演出　中津留章仁／出演　葛西和雄・藤木久美子・吉村直・湯本弘美　ほか

敗戦直後に作られた幻の「大島憲法」に想を得た未来劇。突然の独立通告に揺れる一つの島を舞台に中津留章仁と青年劇場が初タッグで描くこの国の未来！

日程・会場　各事務所にお問い合わせください。

問合せ・申込み　さいわい市民劇場　044-244-7481
市民劇場なかはら　044-455-7950
たま・あさお市民劇場 044-911-6920

◆荒馬座創立 50 周年記念公演
未来へのまつり　50 年後の子どもたちへ

日程　2017 年 6 月 25 日（日）16 時開演

会場　パルテノン多摩大ホール（京王線・小田急線「多摩センター」駅徒歩 5 分）

入場料　指定席　大人 4000 円／割引 3000 円
自由席　大人 3500 円／割引 2500 円

プログラム　第 1 部まあだだよ（アイヌの唄と踊り／八丈島太鼓／貝殻節ほか）　第 2 部未来へのまつり（七頭舞／沖縄の唄と踊り／霊山太鼓ほか）

問合せ・申込み　03-3962-5942　FAX03-3962-5021
HP：http://www.araumaza.co.jp/

◆新劇交流プロジェクト公演　その人を知らず

日程・開始時刻　6 月 29 日（木）～ 7 月 10 日（月）
開演　13:30 または 18:30（お問い合わせください）

会場　東池袋あうるすぽっと（JR 池袋駅東口徒歩 10 分、有楽町線東池袋駅 6・7 出口直結）

作　三好十郎／演出　鵜山仁／出演　文学座・文化座・民藝・青年座・東演　各所属の俳優

入場料　全席指定　一般 5000 円／ 25 歳以下 3000 円

生きること　愛すること　抗すること――戦争と愛と人間を描く三好戯曲

問合せ　プロジェクト事務局　TEL 03-3419-2871

◆日本フィルハーモニー　第 43 回夏休みコンサート

日程　7 月 22 日（土）11：00 ／ 14：00

会場　横浜みなとみらいホール

プログラム　第 1 部　交響曲第 5 番《運命》第 1 楽章／バレエ音楽《火の鳥》より　ほか　第 2 部　バレエ《白鳥の湖》　第 3 部　オーケストラの演奏にのってみんなでうたおう（さんぽ／おどるぽんぽこりん　ほか）

入場料　全席指定　S 席小 3200 円・大 5000 円／ A 席小 2500 円・大 4200 円／ B 席小 1800 円・大 3200 円

問合せ　日本フィル　TEL 03-5378-5911

◆第 9 回　かわさき演劇講座
戯曲を読む　即興実演する

日程　7 月 22 日（土）～ 23 日（日）

会場　スペース京浜

講師　【即興】小山裕嗣（舞台演出家・演劇教師・ドラマアカデミー Art-Loving 運営統括）【戯曲】丸尾聡（劇作家・演出家・オフィスプロジェクト M）

問合せ　かわさき演劇まつり実行委員会
044-511-4951　matsuri_engeki@yahoo.co.jp

◆川崎太鼓仲間 響　3rd Live 充電完了

日程　7 月 30 日（日）開演 13:00 ／ 16：00

会場　川崎市アートセンター（小田急線新百合ヶ丘駅徒歩 3 分）

入場料　全席指定　一般 2000 円　小中高校生・障がい者 1000 円

2018 年の 25 周年を前に、小ホールで Live を開催します。これまでの響、これからの響――3rd Live 充電完了！　全力でお送りします。

問合せ　080-1196-3117（玉田）

◆第 19 回　響け！みやまえ太鼓ミーティング

日程　8 月 26 日（土）第 1 部　14:00 ～ 17:30
第 2 部　18：00 ～ 20：00

会場　第 1 部　宮前市民館大ホール　第 2 部　市民広場（雨天時、宮前市民館大ホール）

参加費　無料

ゲスト　友野龍士（遊坐楽座）ほか

毎年行われている太鼓ミーティングも 19 回目を迎えます。区内を中心に活動している太鼓団体が演奏を披露します。文化協会の協力で着付けコーナーが今年も開設されます。着物・浴衣の着付けサポートが受けられます。

問合せ　宮前区役所地域振興課　044-856-3135

◆山寺圭子　うた・唄・歌　vol.31 にぎやかな秋

日程　9 月 21 日（木）19:00 開演

会場　めぐろパーシモンホール 小ホール

入場料　全席自由　3500 円（当日 4000 円）

ソプラノ　山寺圭子／ピアノ　朝岡真木子・中山真理

演目　An die Musik ／かやの木山の／しぐれに寄する抒情／秋の手紙／君死にたもうことなかれ　ほか

問合せ　TEL 044-511-8995（山寺）

◆第 16 回　たま寄席

日程　9 月 24 日（日）13:00 開演

会場　多摩市民館大ホール

入場料　S 指定席　前売 3000 円（当日 3500 円）
A 指定席　前売 2500 円（当日 3000 円）
後方自由席　前売 2000 円（当日 2500 円）

出演　毒蝮三太夫／桂米多朗／林家たい平／桂夏丸／やなぎ南玉／桂竹もん

問合せ　桂米多朗ファンクラブ TEL/FAX044-944-3346

■文化の仲間ギャラリー■　　大谷　敏行①

大谷敏行の　今日の川柳

「共謀罪」三回目にはそっと出し
二〇一七年三月二六日『赤旗』掲載

言い換えをしてもやっぱり「共謀罪」
二〇一七年一月一七日『朝日新聞』掲載

手鏡を翳すがごとき自撮り棒
二〇一六年九月二五日『赤旗』掲載

「水面下」沈んだままの豊洲かな